

## ( 付録 ) 中国共産党中央党校来日記念会議

2001 年 10 月 12 日

小島朋之教授 副校長先生、中国共産党中央党校訪日団の皆さん、ようこそお越しく下さいました。慶應大学を代表して熱烈な歓迎の意を表します。私は、慶應大学総合政策学部学部長の小島朋之と申します。こちらは大学院研究科委員長の徳田英幸教授です。中国中央党校の重要な地位については、一同存じ上げております。また、皆様が 21 世紀に中国を代表し、中国を指導する重要な指導者であることについても存じております。このように重要な訪日団の皆様をお迎えすることを、一同大変光栄に存じます。

我が慶應義塾大学は、日本で最も長い歴史を有する大学です。2008 年は、建学 150 周年に当たります。我が大学は非常に古い大学ですが、我々の研究と教育は日本の大学の最先端にあります。すでに我々の教授といくつかの研究室、そして学生たちが、お迎えの準備を終えています。この度の訪問を通じて、皆さまに日本の大学の研究と教育の状況をご理解いただければ幸いです。そして、この度の参観と交流を通じ、日本と中国の関係がさらに密接になり、我々慶應大学と皆様との交流が引き続き発展していくことを望みます。ありがとうございます。

通訳を担当して下さるのは、大学院博士課程の李森さんです。彼女は帰国からの留学生であります。私の研究会には貴国からの留学生が 7、8 名おりますので、彼女たちも皆様をご案内いたします。では、李さんから今日の日程を説明していただきます。

総合司会・通訳(李森) 皆さんこんにちは。私は慶應大学博士課程 2 年の学生で、李森と申します。中国からの留学生です。本日司会

と通訳を務めさせていただき、大変光栄に存じます。どうぞ宜しくお願いいたします。

では、簡単に本日の会議の内容についてご説明いたします。本日は最初に、こちらで上海復旦大学の学生とインターネット遠隔会議を行います。

まず日本側が発表し、次に復旦大学の学生に発表してもらいます。その後自由討論を行います。会議終了後、続けて慶應大学常任理事の斎藤信男教授によるご挨拶がございます。その後、各々の学生が、慶應大学藤沢キャンパスをご案内いたします。以上です。よろしく申し上げます。

それでは、インターネット遠隔会議を行います。ここでの司会は修士課程二年の原川貴郎君に申し上げます。

申し訳ありません。再度補足します。本日午後 5 時ごろから大学南食堂で慶應大学主催の歓迎レセプションを設けてございます。時間は 17:00 から 18:00 までです。

司会(原川) 皆さん、こんにちは。私は修士二年の学生で、原川貴郎と申します。今回のインターネット遠隔会議の司会を務めさせていただきます。どうぞ宜しくお願いいたします。

まず、私たちの小島研究会の活動内容についてご紹介させていただきます。私たち小島研究会の学生の研究領域は、政治・経済など東アジアの国際関係を中心にしております。毎週、異なるテーマをめぐり、主に学生が報告をする形でゼミを実施しております。こうした通常の研究会の他にも、一昨年度から海外でゼミを行うようになり、初回は韓国・ソウル延世大学、そして昨年度からは上海復旦

大学との合同研究会を実施しています。本日のインターネット遠隔会議の内容は、私たちが9月に上海で行った合同研究会を短くまとめたものです。この遠隔会議を行う主要な目的は、皆様方にSFCの先進技術をご理解いただくことです。それでは、日本側の学生から10分程度の報告を行ってまいります。

慶應(佐藤妙子) 発表

(合同研究会、第一部・慶應報告論文と同じ)  
司会 佐藤さん、発表ありがとうございます。日本側の発表は東アジアの安全保障の分野における協力と、いかに信頼関係を築くかを中心に、中国に期待を表明するものでした。それでは、次に中国側に報告をお願いします。

復旦(陳玉聃) 発表

(合同研究会、第一部・復旦報告論文と同じ)  
司会 報告ありがとうございます。中国側の発表は主に文化の概念を中心に、文化の東アジア政治・経済協力を果たす役割は非常に大きい、とするものでした。東アジアの協力、日米、中米関係を考える際には、文化という要素も考慮しなければならないという主張がなされました。それでは、大体午後2時10分まで自由討論を行いたいと思います。自由討論は主に中央党校の来賓の皆様質問をしていただき、日中双方の学生がそれに答えるという形で行いたいと思います。発表の際には、まずお手元のスイッチを入れ、発表の後、再度スイッチを切ってください。来賓の皆様、復旦大学には時間の関係がございますので、まず中国側に対して質問していただけますでしょうか？

今一度ご説明いたします。中央党校の来賓の皆様から復旦大学に質問をしていただき、復旦の学生はその質問に回答して下さい。

中央党校A 先ほどの中日双方の発言は感慨深いものでした。復旦の学生に聞きたいのですが、あなたたちは日本側の学生が発表中に提起した問題について、どんな意見をもっていますか？少し話して下さい。

復旦(陳玉聃) まず簡単に、二言述べさせていただきます。日本側の学生は、主に日本の全アジア・太平洋の地域協力における役割について述べました。また中国の全アジア・太平洋地域における地位と役割についても言及しました。中国と日本は非常によく似た隣国同士で、共通の認識と共通の対処の仕方があるはずだと思います。中日間で強調すべきは衝突ではなく、より多くの和解と寛容であるべきです。日本側は発表中、科学調査団について言及しましたが、中国側もずっと釣魚島付近の活動に対して非常に大きな警戒感を抱いています。中日間の理解の不一致は現実存在しますが、最も重要なのは、この種の問題に対する私たちの態度です。日本の前首相、村山富市は、中国を訪れた際つぎのような揮毫をしています： 歴史を正視し、中日友好と永久平和を祈念する 10月8日に小泉首相が中国を訪れた際にも二文字を残しています。彼は中日伝統の毛筆を用い、中国の古代の思想家である曾子の言葉を書き記しました

「忠恕」 彼は随行していた中国大使に対して、この二文字の含意は相互の諒解と寛恕、そして理解であるべきだと説明しました。ですので、私は中日間に存在する政治経済上の衝突や歴史問題に対する異なる見方は、なんら恐れるものではなく、重要なのは前向きな態度で歴史に向かい合うことです。

復旦(沈毅) 少し補足したいと思います。国際関係の理論の角度からみるならば、日本側の発表は現実主義或いは新現実主義から受け

た影響を典型的に示していると思います。日本側はアメリカのアジア・太平洋地域の軍事的プレゼンスが地域の平和に果たす重要な役割と、日米同盟の地域の安定に及ぼす積極的な役割を強調しましたが、これは日本自身が日米同盟の構成員であることから、同盟は地域の安全と安定の実現に助くものだと見なしているのだと思います。しかし、同盟に含まれない国家、例えば中国は日米同盟、とりわけ日米同盟の強大な経済軍事力を深く憂慮しています。ゆえに、このような一種の微妙な現象が起こっています。中国と日米同盟或いは中国と日本は互いに脅威を感じており、双方が安全保障の問題の上で、一種の苦境に陥っています。中国の学生として、この地域の平和と安定の実現の基礎は、勢力均衡ではなく各国間の真に平等互惠の状況下でのコミュニケーションであると考えます。相互不信と誤解を取り除き、真の平和と安定を実現するのです。まだまだ先は長いと思います。

中央党校 A ありがとう。

司会 復旦大学の皆さん、時間のほうは大丈夫でしょうか？3時5分まで、と聞いていますが。

陳志敏副院長 あと二分程度あります。

司会 それでは、最後に復旦の学生が陳副院長からひと言いただけますでしょうか？

陳志敏副院長 慶應大学及び中央党校の皆さん、本日インターネットテレビ会議という方法で日本の学生とコミュニケーションできたことを非常に嬉しく思います。また中央党校の各指導者の皆様が今回の対談と討論に参加してくださったことも、大変嬉しく思っています。今日の会議は、現代の技術が地理空間上の障害を克服できることを証明しましたが、異なる国家の人民はまだまだこうした技術を利用

して思想上の交流を行い、精神的な不和を打ち消さなければなりません。中国と日本の青年は特に思想上で各形式の意思疎通を行い、理解を深め、両国関係の発展を促進する必要があります。とおもいました。

小島朋之教授 陳先生、ご協力ありがとうございました。これは私達の協力の始まりにすぎません。他にもご相談したいことがあるのですが、E-mailをお送りすることにします。陳志敏副院長 私たちは引き続き他のプロジェクトを行い、将来より深い効力を行えるものと期待しています。

司会 まだ6、7分ございますので、中央党校の皆さまは日本側の学生に質問をお願いいたします。

中央党校 B 佐藤妙子さんに質問したいと思います。佐藤さんは発表中このような観点について述べられました。それは、冷戦期には日米同盟は主にソ連の脅威を抑止するためのものだったが、冷戦が終結し、ソ連の脅威が無くなった後、言い換えれば日米同盟が仮想的国を想定していない今は、地域の不安定要素に向けられているという観点です。こうした不安定要素が存在する状況下で、日米同盟が発揮するのは公共利益を擁護する役割だということでした。また日米安全保障が地域に与えるメリットについては、第三部分で、もしアジアに紛争が起きた場合、日米同盟は当事国が一方的に武力を使用しないよう、これを抑止することが可能だ述べられました。また、同盟が存在することによって、地域に安心感が与えられるということでした。もしそうだとすると、これは日米の役割がまるで世界警察のようで、日米がアジア大家族の家長を担おうとしているように思えてきます。慶應(佐藤)簡単にお答えします。先ほどの

発表で私の論点は、日米中三カ国を起点にしています。ですから触れたのは三カ国のみです。一部にソ連に関する内容がありましたが。中央党校C 二つ小さな質問をします。ごくごく小さな二つの常識について、日本の学生はどれだけ理解しているのでしょうか？まず一つ目。近代史 100 年来でアジア、とりわけ東アジアで最も不安定な要素は何だったのでしょうか？アジアの近代史上で数多く侵略戦争を引き起こしたのはどの国家だったのでしょうか？皆さんはどれだけ知っていますか？二つ目は現実の問題です。在日米軍基地から離陸した米軍用機が頻繁に中国沿海領空で偵察活動を行っています。このことを知っていますか？中国の海洋調査団は、日本人民がこれほどまでに不安定な感覚をいたる感覚を認めていない。

米軍の中国領海領空侵犯に対しては、国際政治の観点からはいかに評価すべきなのでしょう？

慶應（小幡）私は歴史的観点から安心感の問題についてお答えしたいと思います。第二次世界大戦において日本が中国を侵略したことは事実だと思います。しかし、もし戦後の日本社会をよくみて理解するならば、日本が再び侵略をするような可能性を考えるのは全くナンセンスなことだと思います。

司会 申し訳ありませんが、時間の関係がございませぬ。まだまだ日程も残っておりますし、最後にレセプションも設けておりますので、来賓の皆さまにはその時間を利用して我々日本の学生に……。

中央党校C あと二分だけ私に下さい。

司会 では、一分だけどうぞ。

中央党校C 若い学生からこうした意見がきかれたの、大変遺憾に思います。私も

大学で教鞭を執っています。未来の日米、日中の発展は、あなた方 20 歳前後の若者にかかっています。他国に脅威を与えたことのある国家が脅威を与えられた国に対して別の国家の脅威を語り、あなた達が傷ついた人の身体に絶えず塩をまき、いろいろなことを言って、あなた達が日米安全保障条約は東アジアに対して抑止の役割を果たすことができると話しましたが、これが何を意味しているか思い浮かびますか？我々は中日友好関係が世代代にわたって続いていくことを切に望みますし、我々も今回このために参りました。あなた達と復旦大学の相互意見交換は、まさにこの言葉のために行われるものだと思います。

相互に学び、歴史と鑑として、ともに日中関係を発展させよう。まず、歴史は過去のことであり、総括はできても、変えることはできません。歴史を直視し、歴史を戒めとして、未来に向かうのです。私も大学生だった時期がありますし、学生を教えたこともあります。同じく国際政治です。私は、私たちが自分の脳を使って問題を考え、自分の目で問題を観察し、中日友好に貢献することを切に希望します。

司会 最後に発表を行ってくださった両名と、遠路はるばるお越しくくださった中央党校の来賓の皆さまに心から感謝申し上げます。総合司会 それでは次に、慶應義塾大学常任理事の斎藤信男教授からご挨拶がございませぬ。斎藤信男先生には、慶應大学三田キャンパスからお話いただきます。

斎藤信男教授 皆さん、こんにちは。私は慶應義塾大学常任理事の斎藤と申します。本来は直接そちらに伺いたかったのですが、所用があつて三田からテレビ会議でご挨拶させていただきます。慶應義塾大学、SFCは、北

(付録) 中国共産党中央党校来日記念会議

京大学、清華大学、復旦大学、上海交通大学等と交流を重ねてまいりました。先日、上海交通大学の副学長をお迎えして、上海交通大学、韓国の延世大学、そして慶應義塾大学の同時交流をおこなう協定を結びました。本日は、これからの中国の将来を担う若手の方々を迎えて大変嬉しく思います。SFCは1990年に設立されたばかりの新しいキャンパスです。私たちは情報技術やネットワーク重視の「情報化」のキャンパスを目指しております。慶應義塾大学には五つのキャンパスがありますが、それらを結ぶ情報基盤を強化し、オープン知識ネットワークを作って円滑な知識共有を図ろうとしています。もちろんネットワークは一つの大学だけでなく、実社会の政府や企業、海外の政府や大学、国際機関等とも結ばれるべきものです。ネットワークのデー

タ共有により、遠隔教育や人材育成にも寄与し、環境問題や安全保障問題を議論することもできます。もちろんインターネットですべてというわけではなく、最後はface to faceが重要になってまいります。その意味で、本日中国から若い方々がたくさんいらっしゃったことは、本当に嬉しく思います。今後とも、慶應義塾大学と中国がアジアの隣人として友好と理解を深め、共同して課題に取り組んでもらいたいと願っています。よろしく願いいたします。

総合司会 皆さんありがとうございました。それではこれより15分間の休憩を取りたいと思います。

この後、慶應の学生が中央党校の方々をSFC重要施設に案内した

